

## 『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』の「死者の聖務日課」挿絵 — 「死の受容」から「悔悛」へ

白川衿子 (早稲田大学)

---

『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』(*Les très riches heures du Duc de Berry*)は、15世紀初頭に制作が始められた。ランブール兄弟によって挿絵が描かれたが、注文主であるベリー公の死にともない、制作は中断された。本発表で取り上げる「死者の聖務日課」という部分は、1416年の中断から半世紀以上も遅れ、ブルジュの画家ジャン・コロンブによって、当時の所有者であるサヴォア公の下で制作されたものである。

「死者の聖務日課」には、f.82r から f.107r にかけて祈禱文が載せられている。各定時課の祈りの冒頭には、全ページ大の挿絵《嘲笑されるヨブ》、《レイモン・ディオクレの葬儀》、《死の騎士》、《ダビデの勝利》、《ダビデの悔悛》が配され、加えて「死者の聖務日課」の最後を飾る《地獄》の計6枚が描かれている。これら挿絵は、それぞれ独立して定時課の祈りの文句と結び付けられて、主題が選択されているように見える。しかし発表者は、これらの挿絵を定時課の流れに沿って一体のものとして見ることによって、一つのテーマが浮かび上がってくると考えるものである。

本写本の「死者の聖務日課」は、晩課、朝課、讃課から構成され、日没から日の出にかけての定時課の祈りが記されている。日没の時間帯に行われる晩課の冒頭では《嘲笑されるヨブ》が描かれ、信者に対して、現世における富や栄華を否定する。朝課は三つの宵課(*Nocturna*)からなり、それぞれの冒頭に《レイモン・ディオクレの葬儀》、《死の騎士》、《ダビデの勝利》が配置される。これら3主題は「万人に平等である死」、「死に対する人間の無力さ」を信者に示す。最後に讃課の冒頭では《ダビデの悔悛》が描かれ、信者に「悔悛の必要性」を訴えかける。信者は、実際の日の出の時間が近づくとともに、暗い洞窟を背景に青空を仰ぎ見るダビデと、自身を重ねることとなるのである。「死者の聖務日課」全体の最後を締めくくる《地獄》は、時禱書の挿絵を初期に手がけたランブール兄弟によって描かれたものであり、後代に「死者の聖務日課」に挿しこまれた可能性があるものの、死後の恐ろしい世界を描くものとして今一度信者に悔悛を促すものとして理解できる。つまり、信者は祈禱文を唱えながら6枚の挿絵を順に見ることによって、万人に平等である死を夜の間を受け入れ、悔悛を通じて朝を迎えるのである。

キリスト教美術においては、「死の舞踏」を始めとして、死に関わる美術が広く研究されてきた。しかし「死の舞踏」に比べて、「死者の聖務日課」挿絵に関する研究は、充分になされているとは言い難い。本発表は、『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』の「死者の聖務日課」という一例を通じて、中世末期における「死」の表象についての一考察となるものである。